

日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA



第176回定期演奏会

The 176th Regular Concert

コンポーザーズ・プロジェクト・シリーズVI

間宮芳生氏からのメッセージ

Composer's Project Series VI: message from MAMIYA Michio



2004年9月28日[火]

午後7時開演(午後6時30分開場)

津田ホール

- ：主催：特定非営利活動法人日本音楽集団
- ：助成：平成16年度文化庁芸術団体重点支援事業
(財)花王芸術・科学財団

■ 日本音楽集団：<http://www.promusica.or.jp/>
<http://www.wahoo-net.com/promusica/>
E-mail office@promusica.or.jp



一、 **タクシム** (1986年) 間宮芳生作曲

MAMIYA Michio : Taqsim

[尺八] I 原郷隆 II 渡辺淳

[太棹三味線] 山崎千鶴子

[二十絃箏] 早川智子

[打楽器] 尾崎太一・高橋明邦・多田恵子・盧慶順

二、 **野のうた その一 ~箏独奏のための** (1983年) 間宮芳生作曲

MAMIYA Michio : Nonouta, No.1

[箏独奏] 宮越圭子

三、 **菅江本奥じゃうるりより「大男」** (1999年) 間宮芳生作曲

MAMIYA Michio : Ootoko(Giant) ; from Sugaebon-Okujoruri

[唄] 田中悠美子 [三味線] 杵家七三

四、 **wa-ta-ri IV (委嘱・初演) (2004年) 原田敬子作曲**

HARADA Keiko : wa-ta-ri IV for 13 performers (traditional Japanese Instruments)

[笛] I 竹井誠 II 越智成人

[笙] I 増田千斐(助演) II 米澤もも(助演) [箏] 三浦元則(助演)

[尺八] I 阪口夕山 II 渡辺淳 [胡弓] 吉澤昌江(助演)

[二十絃箏] 桜井智永 [十七絃] I 久東寿子 II 高橋はるな

[打楽器] 多田恵子・望月太喜之丞・若月宣宏

[指揮] 田村拓男

・・・休憩・・・・・・・・・・・

五、 **難蔵ものがたり** (委嘱・初演) (2004年) 間宮芳生作曲

MAMIYA Michio : Nanzo tale

[語り] 箕田司郎

[笛] 越智成人・西川浩平 [尺八] 竹井誠

[太棹三味線] 山崎千鶴子 [薩摩琵琶] 首藤久美子

[箏] 久本桂子・三宅礼子

[打楽器] 尾崎太一・仙堂新太郎・盧慶順

六、 **日本のうた** (1984年) 間宮芳生編曲

MAMIYA Michio : Songs of Japan

荒城の月・ずいずいずっころばし・平城山・松島音頭

[チェロ] 金木博幸(客演) [チェンバロ] ローラン・テシュネ(客演)

[笛] 西川浩平 [尺八] 原郷隆

[細棹三味線] 杵家七三・守啓伊子

[箏] I 桜井智永 II 田村法子 III 三宅礼子 [十七絃] 久本桂子

[打楽器] 多田恵子・望月太喜之丞・若月宣宏

[指揮] 間宮芳生



邦楽といい、洋楽という、その領域の壁を越え、または壁をたたき割って、ひとつの領域となるのがいいのか？

〈現代邦楽〉という言葉が、私たちの望む、日本の伝統音楽が新しい時代に採る姿にふさわしいよび名か？

可能性は決して一つではないはずだが、その中のひとつの道を選択し、貫いて、日本音楽集団の存在は、今や、とても重味のあるものである。

一例を挙げれば（話が脈絡をはずれるようだが）箏と琴（コトとコト）の歴史を見ると、一絃から、たしか七十絃までである。七十絃は、かぎりなく12半音の世界に溶けようとしたと言っていいだろう。しかし、それを使う人間も楽器も含めて、西の12半音システムとの融和にはあまり成功しなかったようだ。ほとんど同じ理由で〈和洋合奏〉は、「春の海」のヴァイオリンと箏以上の成功はなかったと言ってもいいくらいだ。でもそれは、〈和洋合奏〉には、この後の成功の見込みがないという意味ではない。

大切なのは、日本の楽器は、五音音階の音楽用につくられているということだ。楽器のつくりも、音いろのくせも。そのことにこだわりつつ、日本音楽集団は、音楽の新しい地平を求めて来たはずだし、これからもそうするだろう。

私の場合をいえば、五音音階用の楽器を用いながら、12の半音の世界と領域横断をためしたくて、すると別々の調に調絃した箏4面が必要になって作ったのが「四面の箏のための音楽」（1957年）だ。そんなことをせずに、たとえ一面でも、五音音階用とはらをくくってなお五音にしばられずに自由に構想出来るはず、とほぞを決めるまでほぼ25年かかって、「野の歌、その1」が出来たのが1983年だ。それで、このコンサートは、そこからのプログラムである。

原田敬子さんは、作曲も、演奏も、日常からのジャンプ（飛翔）によって、異次元を見ることなのだ、と知っているし、そういう世界を見ている稀有の音楽家だ。原田さんの新作が、どんな予期せぬ事件をおこしてくれるか、期待しよう。

曲について

タクシム

1986年、日本音楽集団の委嘱で作曲。その年11月12日日本音楽集団第96回定期演奏会で初演された。以来ずっと演奏の機会がなかったので、久々の再演である。

タクシムは、アラビアまたトルコの音楽で、自由リズムでの即興のやり方の呼び名らしい。幾人かの即興のかけあいになることも多い。歌の曲の伴奏楽器（群）による導入部分をいうこともあるという。

この曲は、尺八、二十絃箏、太棹三絃による第1の合奏グループと、3人ないし4人の打楽器による第2の合奏グループが、別々に互に他から独立した、音楽を進行させる。それぞれのグループ内では拍子を合わせるが、二つのグループ間のつながりは、原則不確定である。第1グループは、まず尺八ソロ、ついで箏が参加、次に箏と三絃による曲の中核をなす部分、おわり近く尺八が再び参入、そのプロセスに、折々、打楽器群の囃子がからむわけだ。おわりは打楽器だけが残る。

野のうた その一（1983年）

希代の箏の名手沢井忠夫さんの委嘱で作曲された。

低音部と高音部と、異なる調に調絃し、一種の二重調性を仕組んである。いわばイビツな旋法。導入部は、弓の弦（つる）を矢でたたき鳴らすような（あずさ弓風）のAの強音の連打。やがて、中音部の二つの糸を微分音的にずらして（つまり高・低両部分の別の調を連絡させて）はじまる節（ふし）まわしは、いわゆる「いたこ」と呼ばれる、死者の霊がその口を借りて現世に向けて語るのだと信じられて来た、巫子の「口寄せ」または「仏下し」の語りの旋律型がもとになっている。だがもともと、日本人の間には文章を音読すると節がつく、という習慣がひろく存在していた。少なくとも第二次大戦前ぐらまでは、生きていた習慣だが、その旋律型と、「いたこ」の口寄せのふしは同じものだったのだ。私が知る中では、私が中学生のとき、国語の教科書を、節つきで朗々と音読してくれた名物教師がいた。そして私の祖父は毎日朝夕、新聞を節をつけて音読していた。この旋律型は「タクシム」の主要部分の楽想と共通している。

この曲では、しばしば、休止符にアクセント記号や、強弱記号、そしてクレッシェンドなどを書きこんでいる。つまり、音のない「間」の空気の濃さや「りきみ」などを書きあらわしたかった。その扱いについて、沢井さんが全く何の質問もせず、みごとに生き生きした間に演じてくれたことを、今も鮮明に思い出す。

「大男」(1999年)

江戸時代後期、三河(愛知県)の出で、三十才で生国を出て、以来四十余年の生涯を東北一円とえぞ地(北海道南部)をくまなく歩く旅にすごし、民衆の生活文化を、刻明に記録しつづけた菅江真澄(すがえますみ)という文人がいた。

柳田国男が日本民俗学の祖と呼んだ、その人が残した記録の価値は、はかり知れないものがある。彼の書の中に「ひなのひとふし」という巻があり、200年前にうたわれていた数々の民謡の詞だ。今(現代)うたい継がれている民謡と同じ詞はその中にほとんど皆無だ。他方、別の巻には、たとえば岩手の毛越寺(もうつうじ)の延年(えんねん)の芸能についてくわしい記録をしているが、その中に書かれている延年舞のうたの詞は現在つたえているものと寸分ちがわない。

その差の意味を考えることも実に面白いが、今は「ひなのひとふし」の中的一篇「大男」の話だ。それはめいしど(盲人)のうた「早物語」という幾篇の中のひとつである。一種のざれうた、多くは「ホラ話し」なのだ。もしかすると、いわゆる「ごぜ唄」の聞き書きと思われる。というわけで、三絃伴奏のうた(又はひき語り)に作った。実は、1997~99年の三年にわたって、菅江真澄の残した東北の200年前の記録(民謡、伝説のきき書き、飢饉や大地震の惨状の記録まで)をテキストに、語りもの音楽「菅江本奥じゃうり」三部作(トータル約5時間、国立劇場の委嘱初演)のうち、その三(鬼ぶし)(1999)の中の一曲だ。

難蔵ものがたり(2004年)

テキストは「大男」とおなじ菅江真澄の書の中からのもので、これは、「ひなのひとふし」の巻にあるような歌謡でなく、伝説の聞き書きのひとつだ。「菅江本奥じゃうり」に含まれなかった一篇。タクシムの延長上ともいえるポリ・ミュージックがここでも部分的に試みられている。

物語りは、一人の女(実は蛇の化身)を争った大蛇2頭、一話の中では、一方は八つの頭をもち、他方は難蔵が身を変えた九つの頭をもつ—のうち一方(八つ頭の方)がやぶれて八郎潟(菅江は“あきたのうみ”と書いている)に逃げたというもの。それにしても主人公が難蔵という変な名なのもおかしいし、争いに勝ったあと難蔵が人間にもどったのか女になってあらわれた大蛇との間の結末がどうなったか、不明なのも面白い。

日本のうた(1984年)

和洋合奏に難くせをつけながら、「日本のうた」は、その和洋合奏である。ヨーヨー・マのチェロで、日本のなつかしいメロディーを、そして日本音楽集団が邦楽器の合奏で伴奏する、というプランが誰から出たものか、今はもうさだかでない。その編曲をという相談をもちかけられた時、5音音階のための楽器になじむ旋律を選ぼうと考え、古謡「さくら・さくら」「ずいずいずっころばし」九州の民謡「ちらん節」を含む10曲に決めた。その中から今日は四曲。

チェロは、時に自由に、バッハ風にも、ジプシー音楽風にもなった。山田耕筰の「松島音頭」は五音音階で民謡風の旋律なのに、ヨーロッパの長調の主音で終わるので、日本の旋法にはじまり、そして終わるように前奏・後奏をつけた。古都へのあこがれをうたった「ならやま」(平城山)には、尺八の序奏を書いた。その序奏を吹いた坂田誠山さんの尺八の深い呼吸に感動したヨーヨー・マがすごい名演をくりひろげていったのを、今また思い出す。

【プロフィール】

間宮芳生

1929年北海道旭川市生れ。1952年東京音楽学校(現東京芸大)作曲科卒業。以来一貫して日本作曲界の第一線にある。

作品は、オペラ、合唱作品、管弦楽曲、室内楽曲、邦楽作品など多岐にわたる。ことに「合唱のためのコンポジション」15作(1958~2002)、独唱とピアノのための「日本民謡集」全24曲(1955~99)、オペラ「昔嘶人買太郎兵衛」「鳴神」(1959、74)、「菅江本奥じゃうり」三部作(1997~99)など、声を媒体とする作品群は、日本と世界の民族音楽の持続的研究に立脚した独創的な領域をなす。

その他の主要な作品としては、「オーケストラのためのタブロー'85」、「ピアノ協奏曲第1番~4番」、「ヴァイオリン協奏曲1・2番」、「チェロ協奏曲」、「弦楽四重奏曲第1~3番」、「ピアノ・ソナタ第1~4番」、などがある。

1970年代以降、アメリカ、フィンランド、ハンガリー、旧ソ連、中国などでの各種音楽祭、芸術シンポジウムに招かれて参加、また、日本現代音楽のコンサートをプロデュース。カナダ、西オンタリオ大学には1977年と81年の2度、短期客員教授として招かれ、作曲、音楽理論を教えた。

1960年、「ヴァイオリン協奏曲第1番」により毎日芸術賞。以来、尾高賞2回、文楽人形が演じたオペラ「鳴神」によりザルツブルク・テレビオペラ賞金賞。小泉文夫音楽賞など受賞多数。1972~92年東京芸術大学講師、1980年以降桐朋学園大学講師、現在同大学特任教授。静岡音楽館芸術監督。



新しい作品に取り組む時には、ほんの少しでも、何か新しいアイデアを試みてみたいと常々思っている。今回、作曲の準備として、日本楽器のために書かれた既存の作品を多く聴いてみて予想以上に驚いたことがあった。それは日本伝統楽器の持つ‘超具体性’だった。ある楽器の1音を耳にした瞬間に、何らかの具体的なイメージを喚起させてしまう圧倒的な力である。この‘超具体性’の感覚は、何百年、或いは千年以上もの間、私たちのDNAに刻みつけられているかのような記憶とでも言おうか。創り手としては、これにどう対峙するか、という問題に直面した。楽器本来の持つ素晴らしい響きを最大限に尊重しつつも、更にこれらが新しく響く音楽を再構築できるだろうか(ここで言う新しく響く音とは、新奇な音響のパレードではない)。

私が今回試みたことは、1999年に始めたシリーズ‘wa-ta-ri’の作曲上のアイデアのヴァリエーションである。奏者が、今、まさに音を奏でようとする瞬間に存在するであろう、様々な身体・精神などの状態を意識的に捉えなおし、主に音楽の時間構成や、音そのものの身振りに反映させることだった。新しい何かが生まれるとすれば、それは音の媒体である奏者自身の内的状態に働きかけるしかなく、奏者自身が実感することなしでは、本当の意味での新しい音は生まれないという考えに基づいている。付け加えると、この、奏者が音を奏でようとする瞬間に存在する‘何か’は、奏者だけでなく、その場を共有する聴き手の期待や予感なしでは生まれ得ない。

タイトルのwa-ta-riは、様々に解釈できるが、例えばそれは‘渡り入る音’であるし、‘こちら(奏者)からそちら(聴き手)へと渡る音’でもある。

【プロフィール】

原田敬子

幼少より作曲を始める。作品は国内外の主な音楽祭や国際セミナーなどの他、各国の現代音楽アンサンブルや、演奏家の指名により広く委嘱を受けている。これまでに日本音楽コンクール第1位、安田賞、E・ナカミチ賞、山口県知事賞、芥川作曲賞などの他、2004年に中島健蔵賞を受賞。また国際交流基金、日加基金、朝日新聞文化財団、野村国際文化財団、ダルムシュタット現代音楽研究所(独)、ロワイヨモン(仏)、バルトークセミナー(ハンガリー)他の助成を受け、2002年には日米芸術交流プログラム(ACC)によりニューヨークに滞在した。2003年には作品<第3の聴こえない耳 II-b’>が、欧州の若手演奏家のためのヤコビ国際コンクール課題曲として選ばれている。

作曲活動の傍ら、作曲フォーラムや、国際アンサンブル・モデルン・アカデミーの日本における企画など、現代音楽の教育の可能性を探っている。自作品集CDは、近年連続して2枚がリリースされている(ベルギーCyprès社とフォンテック社より)。(’93年より桐朋学園に勤務、静岡音楽館講師)。

【客演プロフィール】

金木博幸(チェロ)



札幌生まれ。1979年桐朋学園高校音楽科卒業。同年、日本音楽コンクール第2位入賞。翌年、東京国際音楽コンクール第1位入賞。斎藤秀雄賞受賞。上原与四郎氏、青木十良氏に師事、81年に渡独。84年北西ドイツ音楽大学首席卒業。1988年シュトゥットガルト国際チェロコンクール第3位(1、2位なし)入賞。イタリア国境に近いスイス南部ルガーノ放送響メンバーとしての活動の他、ウィーン、ブタペスト、ルガーノ等各地でリサイタルを行い、オーケストラとも協演した。91年帰国し、東京フィルハーモニー交響楽団首席チェリストに就任、97年より札幌コンサートホールのレジデントカルテット「Kitaraホールカルテット」のチェロ奏者を務めるなど、オーケストラ・プレーヤー、ソリスト、室内楽奏者として多彩な活動を展開し、高い評価を得ている。

ローラン・テシュネ Laurent Teycheney (チェンバロ)



ソルフェージュ、和声楽、対位法、チェンバロ、バロック解釈、ピアノ、伴奏法、作曲などを学び、一等賞を得てパリ国立高等音楽院を卒業。その後、チェンバロ奏者として活躍すると共に、教育活動にも力を注ぎ、1990年から94年までモンルージュ市立音楽院院長を務めた。2001年、音楽之友社より「フランス・バロック舞曲集」を、2003年、全音楽譜出版社より「全音ピアノライブラリー・18世紀フランス王朝時代からの鍵盤曲集」を出版。同年コジマ録音より「チェンバロ十日本」(ALCD-9045)をリリース。現在、東京芸術大学助教授、桐朋学園大学講師。

間宮芳生邦楽作品表

1957	四面の箏のための音楽	4箏
1957	八面の箏と室内オーケストラのための協奏曲	8箏（4奏者）、 fl、ob、2fg、perc、cel、4va、cb
1958	三面の箏のための音楽	3箏
1962	尺八、三絃および二面の箏のための四重奏曲	尺八、中棹三絃、2箏
1971	尺八のためのプレリュード 第1番、第2番	2尺八
1981	夜想曲	地歌三絃独奏
1983	野のうた その一	箏
1984	日本のうた（編曲）	vc、尺八、笛、2細棹三絃、太棹三絃、3箏、十七絃、 3perc、fl、cb、チェンバロ
1985	昔話おいぼれ神様	Br、篠笛、太棹三絃、打物、pf
1985	4の構図	尺八、2箏、地歌三絃
1986	夜想曲第2番	笙、2箏
1986	タクシム	2尺八、二十絃箏、太棹三絃、perc
1988	佗助の首（テキスト=間宮芳生）	声、fl、perc、太棹三絃
1988	尺八とチェロのためのK I O	尺八、vc
1988	野のうた その二	尺八、太棹三絃、二十絃箏
1991	凍てる月 能管とギターのための	能管、ギター
1993	ユメタガイ・ナナグラテンチ・ツガイダン（テキスト=間宮芳生）	声、vn、太棹三絃
1994	六調（りくちょう）	尺八、vc、2箏
1997	菅江本奥じゃうり・そのI《枅がまくらに》（テキスト=菅江真澄遊覧記より、構成=間宮芳生）	4歌手、2三絃（地歌、太棹）、薩摩琵琶、尺八、 2笛（篠笛、能管）、2打物
1997	あゆ川の…田歌	歌十箏、歌十地歌三絃（弾き歌い）
1997	うつほ（テキスト=菅江夏澄遊覧記より、構成=間宮芳生）	箏（ひき歌い）
1998	菅江本奥じゃうり・そのII《しほひかり》（テキスト=菅江真澄遊覧記より、構成=間宮芳生）	5歌手、2三絃（地歌、太棹）、薩摩琵琶、fl、2打物
1999	菅江本奥じゃうり・そのIII《鬼ぶし》（テキスト=菅江真澄遊覧記より、構成=間宮芳生）	4歌手、2尺八（篠笛）、2三絃（地歌、太棹）、 薩摩琵琶、打物
2004	難蔵ものがたり（テキスト=菅江真澄）	語り、2笛、尺八、太棹三絃、薩摩琵琶、2箏、3perc

略号 — fl-フルート、ob-オーボエ、fg-ファゴット、vn-ヴァイオリン、vc-チェロ、va-ヴィオラ、cb-コントラバス、perc-打楽器奏者、cel-チェレスタ、pf-ピアノ

日本音楽集団40周年記念作曲コンクール

国内外から45作の応募

集団の創立40周年を記念して行われる作曲コンクールは海外から17作品、国内から28作品、計45作がよせられ、8月31日に締め切られました。9月末に第1次審査（譜面審査）が西村朗審査員により行われ5～6作品選ばれる予定です。そして12月14日（火）に演奏による本選会が行われます。本選会で選ばれた入選作品は2005年1月25日（火）の第177回定期演奏会で演奏されます。

■ 本選会 ■

日時＝2004年12月14日（火）17時開演 各賞発表19時半から
会場＝けやきホール 指揮＝板倉康明

※入場は無料です。後日チラシを作成しますので、詳細は事務所へお問合せください。

大男

ここに大男ひとりさふらひしが、あんまり日本はせまいとて、すみちがつて踞つてさふらふ、是では腰がやめるとて、つとと立ば雲にぎたを引かけて、霞に笠をはぎとられ、是ではこせがやけるとて、うしろはねにつつとはね、泥なる海にはね込んで、ざんぶこんぶと漕ぎたまへば、袴のまちのあきめより、なんだやらむやりぐやりといふほどに、むさし野へかけのぼり、うちほろつて見給へば、鯨の子供が四五千疋、とりついでさふらふ。須弥山に腰うちかけ、富士山に火をかけて、ぢいぶらぢいぶらと、いびつてたべてさふらふ、是ではのんどがかはくとて、近海の水海を、小蓋などとなぞらへて、するするすつたりとたべたりけり、是でものんどがかはくとて、大地をほつかりとふみやぶり、地獄の釜の蓋を盗みとり、天竺の八日町へ持行、三千三百三十三文に売て、御酒を買つたべたりけり、是もてんぼの皮の物語り。

(菅江真澄遊覧記 ひなのひとふしの巻より)

難蔵ものがたり

菅江真澄

むかし、みかしほの はりまの国なる 書瀉山のふもとに、ほぐゑ経を あけくれずんじける法の師あり。名を難蔵といふ。いつまでも、ながらふ命ありて慈尊の御世にあひ奉らまく、長谷寺にこもり、ひたいのりに経よみしかば、陸奥の国と出羽の国との

あはひに水湖あり、それに至れど。まさしき夢の、みさがあるにまかせて、水海のへたに到り、ひたぶるに ほくゑ経、くひ物を絶ちて よみしをりから、かたはらの石の上に、かほよき女の来て、この経を聴くことひねもす 夜もすがらなり。難蔵おもふに、「わがおほひなる 願ひをさまたげなんと、あやしの姫の いで来て わざわひをなすにこそあらめと、」目もふれずしてみ読経に たましひをこめて、身じろぎもせず 心つゆもみだれず行ふを、「しばし」とて女のいふやう。

「やつがれは、この水に住む をろちなり。あはれ ねがはくは、そこにいでまして経よみたうびて」と。

法師おもふに、われ観音薩摩のをしへのまにまに、この湖に到りて、この女にをらんや。また これもおしへにやと、こころづよさもたゆみけるいろを見て、女の またいふ。
「この湖に八頭の蛇、そのたけ八尋にあまれるが、やつがれを 妾として住めること久し。まさに今に來なん。おびやかし 追ひやらびたうびてよ。わは、君に身をまかせて ここに住ままく」といふ。

法師、そのをろちの いくばくの力あるとも、わが頼むみほとけの力、のりの力を そへたうびなば、なじかは われに及ばんと、八巻のみのりをかうべにいただき、あめつちを おろがみ、待つるほどに、大濤の中にあらはれ、まかがろく いろを逆立て、齒を鳴らして ひとのみにしてんと、寄り來。難蔵たちまち 九頭のをろちと身をかへて、

はたひろと化り、十曲にわだかまりて居たり。かくてためらひ、左右より喰ひかかり 齧みあひ、牛の吼る声して 山谷にひびきとよめき かんときき するがごとく、ふたつの大蛇の眼のかがよふ光は、電のサと照れるがごとし。さばかり広き 水の面も 血の海と染められたり。さりければ 今し世かけて 朱なるをきらふ山ののりあり。八頭のをろち すべなう逃げいなんとすれば、その水尾に大松の生ひふたがりて なほたたかふ。かくて八頭のをろち からうじて 齧田の湖にしぞきぬとなん いひ伝ふ。

難蔵ものがたり註

- みかしほの 〓 三日湖 〓 陰曆三日の速い湖の流、
- はりま 〓 (播磨) 現兵庫
- 慈尊 〓 みろく菩薩の異称。
- あはひ 〓 間、境
- みさが 〓 前兆、めでたいしるし。
- へた 〓 端、辺、水辺
- やつがれ 〓 僕、私、自分の謙称
- たうびて 〓 給いて
- 薩垂(さつた) 〓 ばさつと同義。
- 妾(をんなめ) 〓 めかけ、そばめ。
- やらひ(やらふ) 〓 追い、払う。追い出す。
- まく 〓 推量の助動詞 〓 「ここに住ままく」で「ここに住まん」の意になる。
- のり(法、典) 〓 仏のおしへ、仏法。
- なじかは 〓 どつてか、いかでか 〓 下に反語をともなう。
- 御のり 〓 仏典、経典
- かんとき 〓 かみとき (霹靂) 〓 落雷。
- かがよふ(耀・赫) 〓 きらきらゆれ光る。
- さばかり 〓 さしもの(さほどの意もあり)
- 齧田(あひだ) 〓 秋田
- あひだの湖 〓 八郎潟のこと
- しぞきぬ 〓 退いた

日本音楽集団～邦楽の魅力

目黒に誕生したコンサートホールに
邦楽器オーケストラの響き

めぐろパーシモンホール(大ホール)
2004年12月23日(木・祝) 14:00開演

曲目

古典と現代、「四季」ダンス・コンセルタントI(三木稔)他

新春を飾る日本の響き～和楽器の調べ

演奏:日本音楽集団

2005年

1月2日(日) 11:30 東京オペラシティコンサートホール
1月3日(月) 11:00 町田市民ホール
1月4日(火) 11:30 横浜みなとみらいホール
1月5日(水) 11:30 大宮ソニックシティ大ホール

※会員割引がありますので事務所へお問合せください。

賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動を目指したく、ご協力お願い申し上げます。 募集の詳細はチラシをご参照ください。

【賛助会員五十音順】

法人
(株)全音楽譜出版社
(株)宮本卯之助商店
NPO法人・アーツ・ネットワーク

個人	青柳 堯	西関 緑	杉田 和	繁雄	浜古 田	靖川 子	渡辺 ハル
新井 克	江大 西	関田 富	田原 厚	雄ま	古川 羽	山衣	渡辺 治
飯塚 緒	太田 川	田壁 颯	塚井 愛	子見	本水 野	実徳	Andrew MacGregor
飯吉 正	川岸 藤	彰 陽	た恵 雅	弘子	水森 渡	子京	
藤美 厚	後白	昭	子 靖		渡 渡	子 邦	
今村 文							

特定非営利活動法人

日本音楽集団

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302 TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
http://www.promusica.or.jp/ E-Mail office@promusica.or.jp

箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、
楽器の本質を追究した箏

十七絃箏

二十絃箏

二十五絃箏

Tokyo



Kinkodo

時を超え心に残る音づくり

有限会社 琴光堂

〒152-0003 東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL03(3792) 8481 FAX03(3792) 843
E-mail: kinkodo@v004 vaio ne jp